

いとこのイケメン 双子兄弟に 満員電車

から守って
もらうはずが
気付けば

おまんことクリ同時責めされて
ガニ股アクメ見せつけちゃった話



（乗り換えの駅、思ったより早く着いちゃったなあ……。……。あれ？）

新しい派遣先に向かう初日のこと。

初めて乗る路線の電車で、遅刻しないようにと早めに家を出たわたしは、ホームにふと見覚えのある二つの影を見つけた。

「……颯太さんと、楓真くん……？」

「……みゆ？」

「え、みゆちゃん?!」

振り向く二つの影。顔も背格好も、瓜二つだけれど少しだけ雰囲気が違う。驚いた様子の二人は顔を見合わせて嬉しそうにこちらに近づいてくる。

「えー？ 本当にみゆちゃんだ、どうしてここにいるの？」

「スーッ……ってことは、通勤か？」

「ふふっ、そうそう、通勤！ 派遣先変わってね、今日からこの駅使うんだ」

どこか嬉しそうに歩み寄るその二人はわたしのいとこで、なんと双子の兄弟だ。

キラっとした顔で少し無愛想に見えるけれど本当は弟想いの優しいお兄ちゃん、颯太（そうた）くん。

ニコニコしながら人懐っこくこちらを見てくるのはちゃっかり者の弟くん、楓真（ふうま）くん。

「久しぶりだね、みゆちゃん。スーツ姿も可愛い」

「えへへ、そう〜？ ……って、あれ、二人ともまた背伸びたね!？」

「ばあちゃん家で集まった時以来だっけか……あれもだいぶ前だからな。俺ら、ずっとみゆ来ねえのって声かけてたのに」

「ごめんね〜、お仕事忙しくなっちゃって……」

最後に会ったのが確か二人が高校生の時で、今は大学生のはずだ。あの時からまた身長が伸びたみたいで、すっかり見上げるくらいになってしまった。

小さい頃はわたしの方が背高かったのになあ、なんて思っていると、乗り換えの時間だったように急にホームに人が集まってくる。

流されそうになる私の後ろに颯太くんが立って軽く肩を支えてくれた。

「わ、颯太くん、ありがと……っ」

「ずるい、さっきから兄さん抜け駆け駆けじゃん。僕もみゆちゃんガードする」

「お前は前からガードしろって」

「は……い」

「颯真くんもありがと……！　ここってこんな混むんだねえ、」

そう言った途端に、私を挟んだまま顔を見合わせる二人。

少しの間のあと、口を開いたのは颯真くんだった。

「……この車両に、乗ってたかったの？　みゆちゃん」

「あ、そうなの、ここが一番降りたい駅の出口に近いみたいで」

「みゆ、初めて乗るんだよな？」

念を押すような口調を不思議に思いながら頷くと、二人はどこか安心したようにまた顔を見合わせている。

次に口を開いたのは、颯太くんだった。

「……みゆ。すぐえ混むから、ここ。俺らで守るから、真ん中にいて」

「うんうん。僕らの間にいたら安全だからね」

「そ、そんな……ごめんね、ありがとう……！」

有無を言わせない二人にこくこくと覚悟して頷く。

と、ホームに電車が来る音が聞こえてきた。

「……絶対に俺らの傍、離れんなよ」

「わ、わかった……！」

……その時の私には、本当にすごい満員電車なんだ、という認識でしなくて。

周りのおじさんたちが舐めるような視線で私を見ていたことに、まったく気付いていなかった。

——いとこのイケメン双子兄弟に満員電車から守ってもらわずが気付けばおまんことくり同時責めされてガニ股アクメ見せつけちゃった話——

開いたドアから溢れるように人が出ていく。

わたしは前にいる楓真くんのシャツを掴み、後ろの颯太くんに腰を支えられながらぎゅうぎゅうの満員電車に乗った。

(ここからちょっと長いんだっけ……)

通勤快速のこの電車はかなりの数の駅を飛ばし、主要の駅へと到着する。
ずっとすし詰めかぁ、今日は二人がいてくれるからいいけど……なんて思っていたら、楓

真くんに顔を覗き込まれた。

「……みゆちゃん、襟触ってもいい？　ちよつとだけシャツ、ヨレちゃってる」

「やだ、ほんと？　もちろんいいよ、ありがとう……！」

スーツの襟に巻き込まれてヨレていたシャツを直してもらう。前よりも大きくなった手と、ほんのりと香水の匂いがすることに、改めて二人が大人になったことを実感する。

不意に、直されている様子を後ろからじっと見ていた颯太くんが口を開いた。

「みゆ、髪色ちよつと変えたんだな」

「え、良く分かったね！？　美容師さんに言われてね、最近色味だけ前と違う感じにして……すごい、颯太くん。あんまり普段気付かれないからびっくりしちゃった」

「チークも合うやつにしてくださる。さっき顔見た時、なんか違うなって思って。似合ってる」

さりと褒められてなんだかドキドキしてしまう。前から優しい二人だったけど余計に優しく恰好良くなっていて、さぞかしモテるんだろうなあ……なんて思っていたら、楓真

くんが私の腰に腕を回してきた。

「わ…っ、大丈夫？ 楓真くん、押されちゃった？」

「ふふ、ううん？ 兄さんだけずっとみゆちゃん抱っこしてるのずるいなーって」
「みゆのこととなるとすーぐ羨ましがるな、お前は」

呆れたようにため息をつく楓太くん。楓真くん、小さい頃からよく、おにいちちゃんだけずるい！ って泣いていたっけ。

思い出して小さく笑っていると、何笑ってんだよ、と頬をつつかれた。

「ふふ、昔からそうだったなあと思って。大人になったなあって思ったけど……変わらないね、楓太くんも、楓真くんも」

「そうか？ 背はでっかくなっただろ。みゆくらい簡単に持ち上げられるぜ」

上から降ってくる声にまたまたあ、そんな軽くないよーなんて話していると、目の前の楓真くんが横に視線を向けていた。

颯太くんへと顔を寄せてぼそりと呟く。

「……ねえ、兄さん」

「やっぱダメか……」

目の前に近づく端正な顔立ちに心臓が跳ねる。かわいいと思っていた二人だったけれど、いつの間にかものすごいイケメンに成長していた。

いつも穏やかに笑っているイメージの颯真くんも、真剣な顔をするときやっぱり瓜二つだなあ……なんて呑気に思っているうちに、わたしを挟む二人が徐々に距離を詰めてきて。

気付けば、肩も腰も、おしりも……胸も、二人に触れていないところがないほどになってしまった。

「あ、の……っ二人とも……っ？」

「ごめんね、みゆちゃん、嫌だよね」

「う、ううん……っ！ 二人なら全然……わたしこそ、その……ご、ごめんね……っ」

「みゆ、颯真に腕回せるか？ このあと揺れるから捕まっとけ」

屈んだ颯太くんは耳元で囁かれてびくっと身体が震える。言われるがままに楓真くんを腕を回して捕まらせてもらった。

最近少し体重が増えてしまって、あちこち出っ張る体がぴたりとくっついてしまって恥ずかしい。

(い、いくらなんでもこの距離はくっつきすぎなんじゃ……!)

心臓がドキドキする。その音も聞かれてしまっているんじゃないかと思いながら、揺れる車内でぎゅっと楓真くんのシャツを握った。

カーブに差し掛かったのか、颯太くんの言う通り、車内が大きく揺れる。

——その瞬間、わたしたちに向かってバランスを崩してくるおじさんがいた。よろけて私に触れかかった手を颯太くんが弾き飛ばす。

「きゃ……っ、あ、ごめんなさ……っ」

「謝らなくていいよ、みゆちゃん」

にっこりと笑う楓真くんはとても優しくだけれど、どこか冷たい空気を漂わせている。楓太くんは苛立ちを隠すこともなく溜息を漏らしたあと、わたしの耳元に唇を寄せた。

「ごめん——みゆ。嫌かもしれないけど、もうちょっと触らせて」

「え……あ、っ!？」

さっきよりもずっと、恋人みたいにぎゅうっと抱き締められて思わず顔に熱がこもると、反対側の耳元に楓真くんが唇を寄せて、どこか甘やかに囁いてきた。

「みゆちゃんね——今、みんなに狙われちゃってるんだ。何にも知らなさそうで……すっごく、可愛いから」

「え、え……っ?」

「何にもせずに守ってやりたかったけど……ダメだな、お前、可愛すぎ。触ってねえと、あぁやって横取りしようってヤツが手出してきやがる」

何？ 横取り……？

わけがわからなくて混乱していると、する、と颯太くんの手が、腰からお腹に滑り込んできた。くすぐったくて肩が震える。

「ここね……有名な場所なんだよ。ここに乘ってる人、見てみて？ みーんな、おじさんもお兄さんも……みゆちゃんのこと、ちらちら見てるの、わかる……？」

わたしにだけ聞こえるよう囁く甘い声にぞくりと背筋が震える。

恐る恐る周りを見ると、一斉に——周りの男の人が、わたしから視線を逸らした。

「触られに来るヤツと、触りてえヤツが来るとこ。痴漢専用車両——なんて呼ばれてる。たまにみゆみてえな、何も知らねえ初心なヤツが迷い込んで、ぐちゃぐちゃにされちゃうの」
「そ、んな……」

一気に心臓が早鐘を打つ。恥ずかしくて二人の影に隠れるように身を縮こまらせると、楓

真くんが頭を撫でてくれた。

「大丈夫だよ、僕らがいるからね。こうしてずっといちゃいちゃしてるフリすれば、他の人に触られたりしないから」

「わ、わかった……ごめんね、二人とも……こ、こんなことさせて……!」

申し訳なくて身を引こうとしても、後ろの颯太くんにお尻をくつつけるだけになってしまふ。身を振る度、電車が揺れる度、お腹に置かれた手がじわじわと上にのぼってきている気がして、顔の熱が引かない。

「全然。みゆこそ、嫌じゃねえ?」

「わ、私も全然……二人になら、怖くないし……ち、ちょっとドキドキするけど……」

「なにそれ、可愛い……ねえみゆちゃん、これは? ……怖くない?」

そう言って颯真くんは、わたしを抱きしめたまま……する、とお尻に手を差し入れて、柔らかに揉んだ。

その瞬間——ぞわりと腰に疼きを覚える。

電車内なのに、周りに人がいて……みんな、わたしを見てるのに、お尻……触られちゃってる。

「……………」

ごくり、と唾を飲み込んだ。

「こわく……ない……、…あっ……!？」

眩いた瞬間、颯太くんの手がむにゅ……っ♡ と、スーツ越しにおっぱいをかき集める。恥ずかしくて思わず声が出してしまった。

「みゆちゃん、しー、声抑えて……? 皆に聞かれちゃうよ」

「こ、ごめ……っん、……っ……♡」

むにゅ♡ むにゅ♡

すりすり……♡

おっぱいを揉まれながらお尻を撫でさすられる。タイトなスカートをじわじわと捲られながら付け根まで指を這わされて、きわどいところをすりすり♡ なぞられる。

（なに、これ……なにこれ、恥ずかしい、のに……痴漢から、守ってもらっただけなのに……わたし、すごく……興奮しちゃってる……♡）

「ふー……ふう……っ♡」

「みゅ……興奮してる？ 可愛い……こんな満員の中で俺らに触られて、ふーふー息してんのエロいって……」

「お顔もね、真っ赤ですっごくかわいいよ。兄さんにも見せたいな……」

ちゅ……♡

這い上がってくる疼きを堪えたいのに、屈んだ颯太くんが首筋に唇を押し当ててきて思

わず背筋が仰け反る。くすぐったさに意識を取られていたら、いつのまにかシャツのボタンが外れていて、胸元へ直接触れられていた。

「みゆの肌、すべすべでもちもち。フリだけじゃなくて、本気で……ずっと触ってたくなる」
「そうた、くん……っ、まって、恥ずかし……っん、ん……♡」

こんなにはだけていたらブラジャーが見えてしまう、そう思って颯太くんの手を止めようと身動ぎした瞬間、スカートを捲りあげられてパンツが見えてしまっていることに気付いた。

——頭がおかしくなりそうだ。

「ふ、ふたりとも……っその、もう、これくらいで……、っ!?!♡ ひっ、んん……っ♡♡」

すりすり……♡ すりすり……♡

戸惑いが勝って制止しようとした瞬間、楓真くんの指がパンツの上をつう……♡ とناぞって、割れ目を往復していく。

クリトリスに当たる度にびくりと腰が跳ねて恥ずかしい。

「あは、みゆちゃん可愛い……お股すりすりされると嬉しいんだ。じゃあ、もっとしてあげるね……？」

「ちゃんと声抑えようとして偉いな。ほら、胸にも集中しろよ……ここ、俺が触ってるとこ」

甘い声を両耳に吹き込まれながら、ブラジャーのカップの中に手が差し入れられる。腋側の膨らみを甘やかすようにゆるゆると撫でられて、なぜか息が上がってしまう。

（こんなの、絶対だめなのに……息、荒くなっちゃう……っ♡ おまんこの筋すりすりされて♡ おっぱい焦らされるみたいに揉まれて……どうしよう、バレちゃう♡ えっちな視線で見てたおじさんたちに、わたしの恥ずかしい姿見られちゃう……っ！）

「なあ、みゆ……ここは好き？ 俺らに触られて、興奮してきて……ちょっと膨らんできてる、ココ」

くにゅ…♡

すりすりすり♡　くにくにくに♡

どこか期待していた乳首に楓太くんの指の腹が触れて、よしよしってするみたいに撫でられる♡

「くっくっふーっ、ふう…っ♡　ん、うう…♡」

「あは、みゆちゃん、えっちな顔してる…声、一生懸命我慢してて偉い偉い。こうしてれば他の人にも触られないし、気持ちいいことしかないから、ね。力抜いて、僕らの手だけ感じてて…？」

すりすり♡

カシカシ♡　カリカリカリ…♡

勃起してしまったのか、楓真くんはパンツ越しなのにわたしのクリトリスを探し当てて、布の上から爪先で引っ掻いてくる。

楓太くんもずっと乳首をくにくに♡　するのをやめてくれない。理性の音がぷちぷちと

切れて、気持ちいい♡　しか考えられなくなっていく。

（二人の手だけ感じてたら、訳わかんなくなっちゃうよお……あ、これだめ……♡　きもちいい♡　颯太くんは乳首甘やかされて、楓真くんはクリいじられて♡　二人一緒にきもちいいところ触れちゃうのむり♡　きもちいい……っけど、声は♡　抑えろって言われたから、抑えなきゃ……♡♡）

「んん……ふうう……っ♡　んう……っく、うう……っ♡」

「すげえ息荒くなってる、乳首もピンピンで興奮してんのわかるようになってきたな……」

「兄さん兄さん、僕みゆちゃんのおっぱい見たい」

「……お前ずっと顔見てるクセに」

颯太くんが、しょうがねえなって言うみたいにはあ、と小さくため息をつく。気持ちよさでぼーっとしていると、シャツのボタンがさらに外され、ブラジャーを下にずり下ろされてしまった。

ぷるん、とおっぱいが丸見えになってしまう。

「やあ……っだめ、こんな……っ♡ 見られちゃうから……っ」

「ふふ、みゆちゃんのかわいいおっぱい見れて嬉しい……見られちゃうの恥ずかしいなら、隠しててあげようか？ 僕が、こうやって……っ♡」

はふ♡ ちゅ……っ♡

ちろちろ♡ れろれろろ……っ♡♡

屈み込んだ楓真くんは乳首に吸いつかれてしまった。指とは違うぬるついた甘い刺激にぞくぞくと背筋が戦慄く。

どんどん気持ちよさでいっぱいになっていくのに、クリトリスをカリカリするのも、颯太くんがもう片方のおっぱいをくにするのもやめてくれなくて、つらい。

（うう……っ♡ こんなのに♡ ぬるぬるの舌でかたくなった乳首こすられるの、気持ちいい♡♡ あっ、あ♡ だめ、わたし……おまんこ、濡れてきちゃった……♡）

「んん……っ♡ んう……っ、ふう……♡ だめ、も……手だめえ、ふうま、くん……♡」

「んむ……僕の手やだ？ どうして？ ……ああ、わかった、パンツ濡れてきちゃったからでしょ。僕らの手で気持ちよくなってくれた証だから、嬉しいよ……？」

ぬぷ♡

つぽつぽ♡ ぬりゅぬりゅぬりゅ♡

ぐちよぐちよのおまんこに、布の上から指を出し入れされる。濡れているのをからかわれてるみたいで恥ずかしい。

やだやだっとするみたいに首を降っていたら。耳たぶに唇が触れるほど近い距離で颯太くんが囁いた。

「……なあみゆ、俺の手ならいい？」

「ふえ……っちが、そういう問題、じゃ……っあうっ！？♡ んぐっ、うう……っ♡♡」

片方のおっぱいを楓真くんにとられて手持ち無沙汰だったらしい手をおまんこに這わせる。

クリトリスとおまんこを両方とも刺激されて思わず引きつった声が出てしまっ、颯太

くんがおっぱいを触るのをやめて口を塞いでくれた。

「ふー…っ♡ ふー…っ♡ ご、ごめ…、ふ…うう…っ♡」

「可愛い声だけど、車内だと迷惑になっちゃうからな。こうやってれば平気だろ？」

「ふふ、えっちな鼻息かわいー…」兄さん、みゆちゃんクリがすっごく好きみたい。僕ナカちゅこちゅこしていいじめたいから、クリいいじってあげて？」

大きな手で口を抑えられて苦しくて、それなのになぜか興奮してしまう。

ぼーっとする頭の中で楓真くんがなにか恐ろしいことを言っていたような——と思った瞬間、弾けるような快感が頭を襲った。

ぬふ…♡ ずぬぬ…♡

くりゅくりゅ♡ すりゅすりゅすりゅ…♡

楓真くんには、パンツの横から指を差し入れられ、膣内に指を埋められて。楓太くんには、クリトリスをさっきよりも激しく引っ掻かれてしまう。

（~~~~っ♡♡　なにこれ、なにこれ…っ！？♡　口抑えられてくるしい、のに♡　クリきもぢよくて♡♡　おまんこもきもちよくて、あ♡　ナカつぽつぽだめ、立ってるからおまんこ狭くて指の形しっかりわかりわかつちゃう♡♡　こんなのだめ♡　このままじゃ、電車なのに、イっちゃう…っ♡）

「あは、一生懸命首振ってる、かーわいい…っどうしたの、みゆちゃん？　気持ちいいのっらい？」

「イきそうなんじゃねえの？　足突っ張ってきてる」

「んふっ、ふう、んん♡　うん…っぷは♡　はひ…っ、い…っいき、そ、だから、やめ、ええっ♡♡」

口元を少し解放してもらえたから必死に伝えようとしたのに、膣壁をちゅこちゅこ掻き回されて声がひっくり返る。

二人ともくすくす笑うだけで全然やめてくれる気配がない。

「あーあ、すっごい声出しちゃって、もうバレバレ…っみゆちゃん、ほら、窓見て？　あの

人、すっごく興奮した顔でみゆちゃんのこと、見てる……」

「え……っ、あ……っ!? ふう、うう、っ~~~~っ♡♡」

ちゅこちゅこちゅこ♡

ぬりゅぬりゅぬりゅぬりゅ♡

イけ♡ イけ♡ って言うみたいにナカとクリトリスを同時に引っ搔かれる。自分が出した愛液のせいでちゅとも痛くない。それどころか気持ちいいばかりで、苦しいくらいだ。
……っていうか、楓真くん、今なんて——……誰かが、わたしのこと、見てる……?

（あ……? あ、あ……♡ どうしよ、ほんとに、見られちゃってる♡ スーツ姿の若いお兄さん、なのに……わたしのこと、興奮した目で……♡ あっちのおじさんも……みんな、ちらちら見て……やだ、ほとんどみんな、わたしが……触られてること、気付いちちゃってるんだ……♡♡）

たくさんの興奮した目に見られている。こんなこと、絶対だめなはずなのにちゅとも止める人がいない。

あまりにも非日常すぎる空間に、なぜだか籠が外れたように興奮してしまっている。

と、ガラス越しに若いお兄さんと目が合ってしまった。お兄さんが、興奮したみたいに唾を飲み込む。

その瞬間だった。

「っんぐ♡ ん……んうつ♡ つふあ、あつ、だめ♡ イ……っくくく、う……っ♡」

びく、びくびくびくっ♡♡

身体が大きく揺れて、盛大にイってしまった……♡♡

(きもちいい♡ きもちいいよ……♡ どうしよ、わたし……こんな、クセになっちゃった
ら……♡♡)

「……ねえ、みゆちゃん。今誰見ていったの？」

余韻にふわふわとする頭に、柔らかくも刺すような一言が鼓膜を揺らす。

こっん、と額がくつつく。間近の楓真くんを目を合わせられて喉がひくりと震えた。

「僕らじゃなくてさあ……他の人、見ながらいったよね？」

「え……あ……っ、あ……!!? ご、ごめん、なさ……っ」

「……へえ、他の奴らに見られながらいくの気持ちよかったんだ? ——俺らが触ってんのに」

颯太くんにも不機嫌そうに呟かれて背筋が戦慄く。

もう一度ごめんね、と謝ろうとしたら強引に体ごと振り向かされて、視線が合った。

「みゆ。次はちゃんと俺のこと見てイけよ」

「ふえ……っ、っぎ……?」

「あは、兄さん、僕より独占欲強いんだから。ちゃんと見てあげてね、みゆちゃん」

「ま、まって、わたし……も、むり、いけな、っんむう……♡」

問答無用とばかりに深い口付けが降って来た。驚きよりも気持ちよさが勝って目がとろんとする。

颯太くんはずっとわたしのことを見ている。どこかイライラした目線を受ける度におまんこの奥がきゅん♡と締まる。

「……俺のこと見て、イけよ」

「ん、ん♡ わか、わかった…っん、うう…っ♡」

颯太くんは何回もキスされながら、楓真くんにおっぱいを捕まえられて、優しく爪先でカリカリされる♡

（颯太くんにじーって見られたままキスされるの、頭ぼーとしちゃう♡ あっ、だめ、スカート腰までたくし上げられて、パンツおろされちゃってる♡ どうしよ、おまんこ、丸見えになっちゃった……♡♡）

ぬぷ…♡ ちゅぷぷ……♡

ぬちゅぬちゅ♡　ぐちゅぐちゅぐちゅ♡

丸見えのおまんこに颯太くんの指が入れられてしまう。いったばかりの膣壁が敏感に快感を捉えて、わなわなと足が開いていく。

「ふふ、みゆちゃん足開いちゃってる……♡　恥ずかしいねえ、電車内なのにガニ股でおまんこ丸出しになっちゃってるよ……?」

「はっ、ひ……♡　だめ、あっ?♡　恥ずかし…パンツ、だめっ、あっ、とらないでえ……っ!!♡」

「だーめ、勝手に他のヤツ見てイっちゃった悪い子はパンツ没収、な?」

屈んだ颯真くんは足を持ち上げられ、とうとうパンツを取られてしまった。

その間もくちゅくちゅ♡　こちゅこちゅ♡　とナカを引っ掻く手は止めてくれない。

周りの人は絶対に気付いているはずなのに誰も止めてくれない。それどころか荒い呼吸が聞こえてくる。

「みゆちゃん、これでパンツ濡れちゃう心配なくなったね。まあもうぐちよぐちよだったけ

ど……あは、クリトリスもガチガチ♡ もうこんなの、ちんぽと一緒にじゃんね？ ほらシ
コシコしてあげる、シコシコ♡♡」

シコシコ♡ ちゅこちゅこ♡
カリカリカリカリッ……♡♡

(ひい……っ♡ だめ♡ これだめ♡ おまんこほじられながらガニ股でクリしごかれて♡
きもちよすぎて頭ばちばちちゃう♡♡ こんなのすぐイク、イっちゃう、あっ♡ イ
くときは、颯太くんのこと、見てなきや……♡♡)

うっかりよそ見しないように、しがみつきながら颯太くんを見つめる。颯太くんが一瞬
驚いた後、嬉しそうに顔を綻ばせた。

「みゆ、ちゃんとイクとき俺のこと見てられるようにしてる？ 可愛い……このままイクま
でとろとろのまんこほじってやるから、電車でまんこ丸出しのガニ股アクメキメような……
♡」

ちゅ♡

しこしこ♡ こりゅこりゅ♡

とちゅとちゅとちゅとちゅ♡

恋人みたいに甘いキスをされながら、バキバキに勃起したクリトリスをシゴかれて♡
愛液でぐちよぐちよのおまんこの、一番気持ちいいところを指腹でこちゅこちゅ♡ 引っ
搔かれて♡

もう何も考えられないくらい、気持ちよくなってしまった♡

「~~~~♡♡ あ……っふ……♡ ふたり、とも♡ っわた、ひ♡ また、いくう……っ♡♡」

「ふふ……ちゃんと覚えて偉いね、みゅちゃん。いいよ、いきな？ ほら、」
「イけ、イけ、イけ……っ♡♡」

二人に同時に囁かれてわけがわからなくなる♡

「イク♡ イっちゃう…あうっ♡ まっ、イ…っいっで、る、からああ…っ♡♡」

シコシコシコシコ♡

ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこっ♡

イク瞬間に思い切りナカとクリを刺激されて腰がヘコつく。

すし詰め of 電車の中で、おまんこ丸出しのまま、ガニ股で腰をヘコヘコさせて——わたしはまた、思い切りイってしまった♡♡

「はっ、はっ……ふう……っ♡ ご、ごめ……わたし、た、立てな…っ」

「大丈夫、支えるから。ちゃんと俺のこと見てイけて偉いな、みゆ。可愛かった」

「すっごいびくびくしてえっちだったなー、みゆちゃん。もしかして気に入っちゃった？
こういうの」

「……そん、な……っ」

二人に支えられ、甘やかされるみたいに撫でられながらそう聞かれて、否定ができなく

なる。

どうしよう……と思っていたら、電車のアナウンスが聞こえた。

まもなく——駅、——駅に止まります。お出口は右側——”

「あーあ、もう駅着いちゃった。次は僕のこと見ながら行ってほしかったけど、お預けだね」
「お、おあずけ……っ？」

「みゆ。駅にコンビニあるからさ、下着選べよ。買うから」
「そんな、自分で買うから……！」

答えることに精一杯になっているうちに二人はわたしの服を直してくれて、汗や愛液もウェットティッシュで拭ってくれた。

あつという間に電車に乗り込む前とまったく変わらない姿になる。
……パンツを履いていないこと以外は。

「みゆちゃん、また明日もこの時間？」

「えっ、あ、えっと……ふ、二人は……?」

「俺らはいつもこんくらい。みゆがこの時間なら、また、守ってやるけど?」

誘うように囁きかけられて、ごくりと唾を飲み込む。

どうしたらいいかわからずに、俯いてぎゅっとスカートを握った。

「——さっきのお兄さん、いく瞬間のみゆちゃんガン見してたよ。すっごく興奮した顔してた……きっとまた見に来るだろうね」

「イキ顔奪われたのムカつくし、見せつけたかったな。みゆが誰の指でヨガりまくってるのか」

「そ……んな、……っ」

せっかく拭いてもらったのに、どうしてかまた、つう、と愛液が太ももを伝う。
俯くわたしを二人が優しく覗き込んだ。

「……もちろん、怖かったら車両変えようね? 大丈夫だよ、みゆちゃんの嫌なことはしな

いから」

「俺ら、どこでもみゆのことなら守るから」

「……あつ、ありがと……!」

安心させるように囁かれて頷く。

そうだ、明日は車両を変えないと。

そう思うのに。

わたしを甘く見つめるふたつの視線と、熱っぽく見つめる周りの視線を思い出して――
腰の奥が疼くのを、止められずにいた。